

「ダロウ」と「吧 (ba)」の確認要求用法の比較

呉 紅哲

1 はじめに

日本語の「ダロウ」に、推量の用法と確認要求の用法があることは多くの先行研究で指摘されている。例文(1)が推量の用法で、例文(2)、(3)が確認要求の用法である。

- (1) 学齢期の子どもがいる世帯は、現在でも全世帯の3分の1に過ぎない。この比率は今後いっそう減少する**だろう**。(学び)
- (2) 「常さん、こんな山の中にひとりでしたら淋しい**でしょう**」と加藤がいうと、「いんや、さびしくなんかあらずけえ、さびしくなったら、おらあ歌を歌うだ」といって常さんは安曇節を歌い出したのである。(孤高)
- (3) 女客1 「(修造に) さよりってどれ？」
修造 「(見せて) 綺麗な魚でしょう？ でもね、こうやって開くと (と、包丁を入れて) 黒い膜がある**でしょ**。だから腹黒い人のことをさよりに言ったりするんですよ」さより、ムッと修造を睨む。(寿司)

一方、中国語の文末語気詞「吧 (ba)」にも日本語の「ダロウ」と対応するような用法がある¹⁾。次の例文(4)が推量の用法にあたるもので、例文(5)、(6)が確認要求²⁾の用法にあたるものである。

- (4) 她真的不在了吗? 现在在宇宙的一个遥远的角落, 也许仍然能清晰地看见她**吧**。(蝴蝶)
彼女は本当にいなくなったのだろうか? もしかしたら、この宇宙の遥か遠くのどこかでは、まだはっきりと彼女を見ることができ**だろう**³⁾。
- (5) “你们生气了**吧**?” “没有, 这点事我们哪会生气, 没生。” (一半)
「あなたたち怒っただろう」「いいえ、そんなつまらないことで怒るものか」
- (6) “你瞧, 瞧这堵墙, 看透那屋了**吧**? 瞧瞧, 吴迪又躺回那床上了**吧**? (后略)” (一半)
「見てごらん、この壁、あちらの部屋まではっきりと見えるでしょ? ほら、呉迪がまたベッドに戻ったでしょ? (後略)」

このように、両言語とも「ダロウ」と「吧 (ba)」という同じ形式で言表事態めあてのモダリティである推量と、聞き手めあてのモダリティである確認といったモダリティの階層を異にする意味を表す点が注目される。推量と意味的につながりが強いと思われる(2)、(5)のような用法だけでなく、(3)、(6)のように話し手にとって推量の余地がなく、確実に認識している事柄について

確認を求める、従って確認の対象が聞き手の認識状況へとずれ込んだような用法まで両言語とも類似性を見せている。こういうことを踏まえ、この論文では、対話にしか現われない日本語の(2)、(3)のような、いわゆる確認要求として使われるときの「ダロウ」が、どのような場合に中国語の「吧 (ba)」と対応し、またどのような場合に対応しないのかを考察したいと思う。

2 先行研究

日本語の「ダロウ」と中国語の「吧 (ba)」の対照にかかわる先行研究として木村・森山 (1991) が挙げられる。

木村・森山 (1991) は、聞き手情報配慮と文末形式の関係という観点から分析がなされている。本稿に関係する「吧 (ba)」については、確定情報文において、聞き手情報への依存を明示する形式としている。推量にも、また同意・確認の要求にも用いられる現象については、「それぞれの意味は、聞き手情報依存か非依存かといった語用論的環境の差によって決定される性格のものである。ba それ自身の文法的意味としては、真偽判定の保留もしくは断定の回避、といったようなものと考えておくのが妥当かと思われる。(中略) ba によって判定を半ば保留するかたちで聞き手にもち掛けることによって、聞き手をもコトの認定に巻き込む効果が生じ、そのことが「同意の促し」もしくは「確認の要求」といった読みに繋がる、ということだろう (こうした機構は日本語のダロウと共通するところがある)。」と述べられているように、「ダロウ」と「吧 (ba)」の類似性について重要な指摘がなされている。しかし、木村・森山 (1991) は具体的にどのような場合に両形式が対応し、またどのような場合には対応しないのか、またそれは何故なのかといった具体的な問題にはふれていない。

3 考 察

3.1 「ダロウ」と「吧 (ba)」の確認要求の二つの用法

前掲例文(2)、(3)における「ダロウ」はいずれも確認要求として機能するものであるが、確認の対象となるものが命題が表す事態そのものなのか、それとも命題が表す事態に対する聞き手の認識なのかという違いから、普通、例文(2)のようなタイプと(3)のようなタイプが区別されている。つまり、(2)のようなタイプでは、聞き手に関する事柄についての話し手の推測を、本来的にその当否について決定権を持っている聞き手に判定を求めるもので、例文(2)でいうと話し手によって聞き手の常さんが「こんな山の中にひとりでしたら淋しい」ということは、あくまでも推測であって聞き手の承認を得なければ確実視することのできない事柄である。これに対し、例文(3)のようなタイプは、命題内容の示す事態そのものは確認の対象にはなっていない。話し手は「こうやって開くと黒い膜がある」という命題内容が示す事態については確実なものとして認識しているが、命題内容が示す事柄に対する聞き手の認識状態——聞き手も認識しているという話し手

の推測・想定の妥当性——が不明であるため、聞き手に確認を求めるものである。以下、(2)のようなタイプを「命題確認」、(3)のようなタイプを「知識確認」と呼ぶことにする⁴⁾。

上掲中国語の例文(5)、(6)の場合も、日本語の例文(2)、(3)と同じように区別することができる。例文(5)では「あなたたちが怒った」というのはあくまでも話し手の推測による判断であって、「怒った」の主体である聞き手に確認をしなければ事実扱いのできない事柄である。これに対し(6)では、話し手が視覚によって確実に捉えている「あちらの部屋まではっきりと見える」、「呉迪がまたベッドに戻った」という事柄に対し、目の前の状況を同じく視覚によって捉えたであろうと思われる聞き手の認識を確認することになっている。

邵(1996)は、「吧(ba)」の確認機能について、次のような例文を挙げ、二種類の用法を区別している。

(7) 你们是拿着录音机录下来，整理出来的吧？(邵(1996))

君たちはテープに録音してそれをもとにまとめたんでしょう？

(8) 临走前，我总得有个介绍信吧？(邵(1996))

行く前に、俺だって紹介状ぐらいはもらうべきだろ？

邵(1996)は(7)のように二人称主語をとる場合には「相手のことについての推測的判断を表し、相手に確認を要求することになり(原文：问句表示的是对对方情况的一种估测性意见，并征求对方予以证实。）」、(8)のように一人称主語の場合は、「自分自身についてのことを述べ、相手に意見を求めることになる(原文：问句是对自己情况的一种估价，并征求对方的意见。）」と指摘している。また、三人称の場合は文脈によって、(7)のような意味に解釈されたり、(8)のような意味に解釈されたりするという。このほかにも、「吧(ba)」には次の例文のように疑いの程度がゼロに近い、いわば、知っていながら問い掛けてみせる用法もあると述べている。

(9) 你不是南京人吧？所以你不懂。(邵(1996))

君は南京人じゃないだろ、だから君には分からないのさ。

このように、中国語の「吧(ba)」も日本語の「ダロウ」の「命題確認」の用法(例文(7))及び「知識確認」の用法(例文(8)、(9))ときわめて類似した使われ方をされていることが分かる。

3.2 「ダロウ」と「吧(ba)」の確認要求の特質

日本語の場合、「ダロウ」と類似した確認要求の機能を持つ「デハナイカ」⁵⁾がよく比較される。つまり、どういう状況でお互いに置き換えることができ、また、どういう状況では置き換えることができないのかを観察することによって、それぞれの確認要求としての性質を明らかにしようとするものである。

(3') 女客1 「(修造に) さよりってどれ？」

修造 「(見せて) 綺麗な魚でしょう？ でもね、こうやって開くと(と、包丁を入れ

て) 黒い膜がある {でしょ / ジャナイデスカ}。だから腹黒い人のことをさより
と言ったりするんですよ} さより、ムツと修造を睨む。

(10) 朗 「先輩、どこ行くんですか？」

野 口 「男と散歩する趣味はねえよ。仕事に決まってる {だろ / ジャナイカ}」

朗 「はい」(砂の)

例文(3')、(10)における「ダロウ」は、「知識確認」の用法のものであるが、「命題確認」の用法の場合と違って、上の例文が示すように多くの場合「デハナイカ」に置き換えても文の意味がほとんど変わらない。

一方、中国語の「吧 (ba)」も、上掲(8)、(9)のような例文は文の意味をほとんど変えることなく、「不是…吗 (bushi…ma)」に置き換えることができる。

(8') 临走前，我不是总得有个介绍信吗？

行く前に、俺だって紹介状ぐらいはもらうべきじゃないか？

(9') 你不是南京人吗？所以你不懂。

君は南京人じゃないじゃないか、だから君には分からないのさ。

それではまず日本語の場合、確認要求としての「ダロウ」が「デハナイカ」とどのような違いがあるのかを先行研究をもとに確認しておくことにする。宮崎(2000)では次のような例文を挙げ、例文(11)では「ダロウ」と「デハナイカ」が置き換えることができるのに対し、例文(12)のように聞き手の認識についての確認であることを明示した場合には「デハナイカ」が使えなくなる現象や、(13)(14)のような例文における両者の対照性が指摘されている。

(11) 昔、ここに本屋があった {だろう / じゃないか}。

(12) 昔、ここに本屋があったのを覚えている {だろう / *じゃないか}。

(13) 僕の絵、なかなか上手に描けてる {だろう / *じゃないか}。

(14) 君の絵、なかなか上手に描けてる {*だろう / じゃないか}。

例文(11)と違って、(12)では「覚えている」によって聞き手の認識を問題にしていることが明示されている。また、(13)(14)はそれぞれ自分の絵を褒めてもらうための発話と、相手の絵をほめる発話になっているが、「ダロウ」と「デハナイカ」が対照的な分布をなしている。こういう現象から宮崎(2000)は、「ダロウ」は聞き手の認識を基準に情報を確実化するものであり、「デハナイカ」は話し手の認識を基準に聞き手の認識をそれと同一化させようとするものであると述べられている。中国語の「吧 (ba)」と「不是…吗 (bushi…ma)」の場合はどうだろうか。次は例文(11)~(14)の中国語の訳文であるが、日本語の場合と同じような振る舞いを見せている⁶⁾。

(11') a 以前这儿有过一个书店吧？

b 以前这儿不是有过一个书店吗？

(12') a 你还记得以前这儿有过一个书店吧？

- b *你不是还记得以前这儿有过一个书店吗?
 (13') a 我这画画得很好吧?

- b *我这画画得不是很好吗?
 (14') a *你这画画得很好吧?

- b 你这画画得不是很好吗?

このような現象からみて、確認要求としての中国語の「吧 (ba)」も、日本語の「ダロウ」と同じように、聞き手の認識に基づいて確認を行なう形式で、「不是…吗 (bushi…ma)」と対照的な機能を果たしているとみていいのではないかと思う。

我々人間のコミュニケーションが情報の共有化や共通認識の形成を目指して進行するという一側面があるとすれば、確認要求表現は話し手と聞き手が情報を共有していることの確認を通じて共通認識を形成していこうとするものであると思われるが、その手段として、聞き手に依存するものと、聞き手を誘導するものとが考えられる。そして、「ダロウ」と「吧 (ba)」は、いずれも聞き手が認識しているということを前提に、聞き手の知識・情報に依存して共通認識を図ろうとする、いわゆる聞き手の認識を基準にした確認の仕方であり、「デハナイカ」と「不是…吗 (bushi…ma)」は、聞き手も認識が可能であるという想定を前提に話し手と同じ認識を持つように聞き手を誘導する、話し手の認識を基準にした確認の仕方であると捉えたい。

3.3 「命題確認」の場合

命題内容が示す事柄を聞き手が確定できると想定し、聞き手に確認を求める「命題確認」の用法は、「ダロウ」と「吧 (ba)」が話し手の不確かな判断を聞き手に依存して確実にしていくことによって共通認識を形成していくという、両形式の確認要求としての性質と一致するもので、もっとも典型的な用法であると思われるが、次のような例文が挙げられる。

- (15) a 「お蚕さまの部屋だったのよ。驚いたでしょう。」「これで、酔っ払って帰って、よく梯子を落ちないね。」(雪国)
 b “这里本来是放蚕的房间、你吓了一跳吧？”“醉醺醺地回来、爬这种梯子多亏你没摔下来” (訳本)
- (16) a “姑娘，你大概就是这个村里的人吧，如果我没有猜错的话？”那女子轻柔地一笑，点了点头。(画祠)
 b 「お嬢さん、あなたはこの村の人でしょう、もしぼくが間違っていないなら。」その女の子は軽く笑いながら肯いた。
- (17) a 「お銚子を運んで来て、廊下の蔭に立って、じいっと見てんのよ、きらきら目を光らして。あんたああいう目が好きなんですよ。」「あさましいありさまだと思って見てたんだよ。」(雪国)

- b “她端着酒壶，站在走廊犄角上，直勾勾地盯着眼睛闪闪发光，你喜欢那种眼睛吧？”
“她一定是觉得这场面下流，才这么盯着的吧。”（訳本）

このように、いわゆる「命題確認」の用法において「ダロウ」と「吧 (ba)」はほとんど対応している。曹（2000）によれば、命題確認（曹（2000）では推測確認と呼んでいる。）において日本語原文「ダロウ」に対する中国語「吧 (ba)」の対訳率が80%位に達している⁷⁾。「ダロウ」と「吧 (ba)」の確認要求の性質を考えれば、このような結果は当然であるように思われる。そして筆者は、実際の訳文では対応していない残りの20%ぐらいについては、訳者の意図的な改訳、あるいは誤訳などが含まれるのではないかと思う。筆者が調べた『雪国』の訳本（叶渭渠訳）に限って言うと、原文における「命題確認」の用法の「ダロウ」20例に対し、中国語訳本では15例が「吧 (ba)」に訳されている。そして対応していない残りの5例は訳者の意図的な改訳、あるいは誤訳であると思われるが、次のようなものがある。

- (18) a 「誰だか下手な三味線だね。」「はい。」「君は弾くんだろう。」「はい。（後略）」
b “是谁弹的三弦琴？这么拙劣。”“嗯”“你也弹吗？”“也弹。（后略）”
(19) a 「ねえ、あんた素直な人ね。なにか悲しいんでしょう。」
b “嗯，你真是个老实人。你好像有什么伤心事？”

(18b) では「～吗？」疑問文、(19b) では上昇調による疑問文になっており、日本語の「あなたも弾くんですか」、「なにか悲しいことでもある？」に相当する訳文になっているが、それぞれ“你也弹吧？”“你有什么伤心事吧？”のように「吧 (ba)」に訳しても、不自然ではない。

以上のように、「命題確認」の用法において両形式は対応する例が多く見られるが、これは両形式とも推量という話し手の不確かな判断を表すことと密接な関係があると思われる。しかし、いわゆる推量副詞との共起関係においては違いが見られる。日本語の場合、「たぶん」「おそらく」などの副詞は推量用法の「ダロウ」とはごく自然に共起するが、確認要求の「ダロウ」とは共起しにくいと思われる。次の例文(20)のように第三者のことについてその情報を持っていると思われる聞き手に確認を求める場合は推量と確認要求の中間的なものであると思われるが、やや不自然さはあるが場合によっては共起する可能性もあろう。しかし(21) bのように聞き手のことについての推量を確認するときは非常に共起しにくくなるが、中国語の場合は、(21) aのように共起が可能である。

- (20) a “她大概是一位护士吧？”“不，她的父亲倒在医院工作”
?b 「あの人はおそらく看護婦さんだろう？」「いいえ、彼女のお父さんなら病院で仕事しているんですけど」
(21) a “你大概是一位护士吧？”“不，我的父亲倒在医院工作”（欲望）
??b 「あなたはおそらく看護婦さんだろう？」「いいえ、父なら病院で仕事しているんですけど」

3.4 「知識確認」の場合

「ダロウ」と「吧 (ba)」が「知識確認」の用法として使われるのは、話し手は確実なものとして認識していて、聞き手も話し手と同じように認識している、或いは認識が可能であるという状況であるが、日本語と中国語では対応しない例が多く見られる。結論を先に述べると本稿ではその原因を、話し手が聞き手もすでに認識していると想定（聞き手の認識を基準にした「ダロウ」、「吧 (ba)」を使うか）しているのか、それとも同じ認識を持つことが可能であると想定（話し手の認識を基準にした「デハナイカ」、「不是…吗 (bushi…ma)」を使うか）しているのかという聞き手の認識状態に対する話し手の扱い方の違いに由来するものと考えられる。対応する例から見てみよう。

まず、聞き手に評価を求めるのに使われるとき、日本語の「ダロウ」と中国語は「吧 (ba)」は例外なく対応している。

- (22) a 吉田 「うーん、いい香り。どうぞ」 受け取った雨音、恐る恐る飲む。
 吉田 「美味しいでしょ」 雨音、コックリ頷く。
 吉田 「卵酒なんかよりよっぽど効きます。フランス人の知恵ですね」(WI)
 b 吉田 “嗯，好香啊！你也喝吧！” 雨音接过来小心翼翼地喝。
 吉田 “好喝吧？” 雨音深深地点了点头。
 吉田 “效果比鸡蛋酒之类好多了。这是法国人的智慧啊。”

(23) a “怎么样？这剧场还凑合吧？”“过得去。”李緬寧点头。(无人)

b 「どうだ？この劇場いいだろう？」「まあ、ね」と李緬寧は肯いた。

例文(22)の「美味しい」こと、例文(23)の「この劇場がいい」ことは、話し手にとっては確実に認識しているものである。しかし、聞き手に評価してもらうためには聞き手の意見を聞かなければならない。つまり、聞き手がどう評価するかというのはまさに聞き手の認識に依存しなければならないことであり、「ダロウ」と「吧 (ba)」が聞き手に依存して情報を確実にしていくという性質と一致するものである。このような例文においては、両言語ともそれぞれ「デハナイカ」「不是…吗 (bushi…ma)」に置き換えることはできない。

次に、話し手と聞き手が共通に体験している現場知識や共通の体験を持つ過去の知識などを気づかせたり、思い起こさせたりする場合である。

- (24) a 「お墓参りばかりしてるわ。スキイ場の裾にほら、蕎麦の畑がある {でしょう/ジャナイ}、白い花の咲いてる。その左に墓が見えるじゃないの？」(雪国)
 b “她经常上坟去。你瞧、滑雪场底下有块荞麦地吧、开着白花的。它的左边不是有个坟墓吗？(訳本)
 c “她经常上坟去。你瞧、滑雪场底下不是有块底麦地吗、开着白花的。它的左边不是有个坟墓吗？

- (25) a 「ねえ、このあいだの日曜日あなた私にキスした{でしょう／ジャナイデスカ}」と
緑は言った。「いろいろと考えてみたけど、あれよかったわよ、すごく」(ノル)
- b “咦，上次那个星期日你吻我了吧？”绿子说，“我左思右想，还是认为那很好，好极了。”
- c “咦，上次那个星期日你**不是**吻我了吗？”绿子说，“我左思右想，还是认为那很好，好极了。”

(24)のa、bおよび(25)のa、bが示すように、同じ現場で共通に体験していることや、過去における共通体験の確認の場合は、聞き手も認識している可能性が極めて高く、日本語も中国語も聞き手が既に認識していることとして扱うことができ、「ダロウ」と「吧 (ba)」がごく自然に対応している。ちなみに、両言語ともそれぞれ「デハナイカ」と「不是…吗 (bushi…ma)」に置換えることができることから分かるように、聞き手も認識が可能であることとして扱うこともできる。また、次のように以前に聞き手に言ったことのあることに言及する場合も「ダロウ」と「吧 (ba)」は対応しているようである。次のような例文である。

- (26) a 「横浜。でも行かないわよ、前にも言った{でしょ／ジャナイ}? あの人たち、もう私とは関りあわない方がいいのよ。あの人たちにはあの人たちの新しい生活があるし、私は会えば会ったで辛くなるし。会わないのがいちばんよ」(ノル)
- b “横浜。但我不能去，以前**不是**也说过吗，他们还是不同我发生联系好。他们有他们新的生活，我见了无非徒增痛苦。最好就是不见。”(訳本)
- c “横浜。但我不能去，以前也说过**吧**，他们还是不同我发生联系好。他们有他们新的生活，我见了无非徒增痛苦。最好就是不见。”

例文(22)～(26)は、味覚、視覚、聴覚など感覚器官によって話し手と聞き手が実際にともに経験しているという意味で、聞き手も認識している可能性が極めて高いのに対し、次に挙げるような話し手と聞き手がともに経験していない事柄の場合は聞き手も認識している可能性がわりと低くなると思われるが、日本語と中国語では違いが見られる。

- (27) a 香 織 「ちょっと、菅原さんはなつみの客なんだよ」
黎 子 「仰言ってる意味がよく判らないんですけど」
香 織 「あのね、社会にはルールってものがある{でしょ／ジャナイ}? 赤信号は停まれ、青信号は進め……。」(砂の)
- b 香 织 “等一等，菅原是夏实的客人”
黎 子 “我不太明白仰说的是什么意思”
香 织 “我说，社会有社会的规矩**吧**? 红灯停，绿灯行……”
- c 香 织 “我说，社会**不是**有社会的规矩吗? 红灯停，绿灯行……”
- (28) a 「ううん。よその大学よ、もちろん。私たち高校のときのクラブ活動で知りあった

の。私は女子校で、彼は男子校で、ほらよくある{でしょ/ジャナイ}? 合同コンサートとか、そういうの。恋人っていう関係になったのは高校出ちゃったあとだけだ。」(ノル)

b “哪——里。其他大学，还用说。我们是在课外活动中相识的。我在女校，他在男校。不是经常有合作音乐演奏会什么的吗？就是这种活动。确立恋爱关系倒是在高中毕业以后。”(訳本)

#c “哪——里。其他大学，还用说。我们是在课外活动中相识的。我在女校，他在男校。经常有合作音乐演奏会什么的吧？就是这种活动。确立恋爱关系倒是在高中毕业以后。”

例文(27)では「ダロウ」と「吧(ba)」が対応しており、ニュアンスは違うもののそれぞれ「デハナイカ」と「不是…吗(bushi…ma)」に置き換えることも可能である。しかし、例文(28)が示すように、「吧(ba)」を使った中国語の表現は文脈に合わず、不自然な文になってしまう。これは社会的ルールとしての「赤信号は停まれ、青信号は進め」という一般性を持つ事柄と、「女子校と男子校で合同コンサートをやる」という個別性を持つ事柄の違いから来るものと思われる。ちなみに、次のように「あの時」を付け加えることによって、共に知っている事柄であるという意味合いが強くなると許容度は幾分高くなる。

(28) c “哪——里。其他大学，还用说。我们是在课外活动中相识的。我在女校，他在男校。

那个时候经常有合作音乐演奏会什么的吧？就是这种活动。确立恋爱关系倒是在高中毕业以后。”

日本語の「ダロウ」はまた次のように聞き手が認識していて当然、あるいは理解できて当然であるという状況でも使われるが、中国語の「吧(ba)」にはこのような用法はない。

(29) 朗 「先輩、どこ行くんですか？」

野 口 「男と散歩する趣味はねえよ。仕事に決まってるだろ」

朗 「はい」(例文(10)の再掲)

以上、見てきたように聞き手が認識している可能性の強弱を量る基準を設けることはできないにしても、常識から考えて(27)→(28)→(29)の順に聞き手も認識している可能性が低くなるということはいえそうである。そしてこの違いが、上記例文において見られるような「ダロウ」と「吧(ba)」が対応しないことに関与していると思われる。つまり、日本語の場合は、聞き手が認識している可能性が極めて低い状況でも、聞き手に依存して見せるという、「ダロウ」特有の談話効果を大いに活用していると思う。例えば、次の例文(30)、(31)のように、話し手個人に関する話題であり、むしろ聞き手が知らない可能性のほうが高い状況でも、日本語では「ダロウ」が使える。

(30) (阿川との対談での渡辺の発話であるが、但し、阿川は渡辺の劇団についてあまり知らないと思われる)

今までは劇団が家で、劇団員が家族だった{でしょう/ジャナイデスカ}。だから、「僕と結婚して帰る場所ができたから、解散したのかもしれないね。僕と結婚したのがよく

なかったんじゃないの」って。(阿川)

- (31) 「(日記をつけるのは)いつから。」「東京でお酌に出る少し前から。その頃はお金が自由にならない{でしょう／ジャンイデスカ}。自分で買えないの。二銭か三銭の雑記帳にね、定規を当てて、細かい罫を引いて、それが鉛筆を細かく削ったと見えて、線が奇麗に揃っているんです。(後略)」(雪国)

このような「ダロウ」は、話し手に関する事柄を談話の中に持ち込む際に、あたかも聞き手と共有するものであるかのように扱うことによって、親しみや一体感を強める効果があると思われるが、中国語の場合、このような文脈では「不是…吗 (bushi…ma)」を使うことも稀で、平叙文で表現するのが普通であるように思われる。量的には少ないが、実際に、『雪国』と『ノルウェーの森』を調べたところ、このような用法として使われた「ダロウ」14例のうち、中国語で「吧 (ba)」に訳されたものは一例もなく3例が「不是…吗 (bushi…ma)」に訳されたほかはすべて平叙文に訳されていた。次の(32)は日本語の例文(31)が平叙文に訳された実例である。

- (32) “去东京陪酒前不久。那阵子手头并不富裕，自己买不起日记本。(后略)”

また、次のような例文の場合は、聞き手の家族に関する情報で、聞き手が認識していて当然の事柄であり、聞き手が認識しているものとして扱ってもよさそうであるが、中国語では「吧 (ba)」を使うことができず、「不是…吗 (bushi…ma)」を使わなければならない。

- (33) a 「日記を見せてくれるなら、寄ってもいいね。」「あれは焼いてから死ぬの。」「だって君の家、病人がある {んだろう／ジャンイカ}。」(雪国)
b “要是让我看看日记，去坐坐也不妨。”“我要把那些东西烧掉再死。”“可是，你家里不是有病人吗？”(訳本)
#c “要是让我看看日记，去坐坐也不妨。”“我要把那些东西烧掉再死。”“可是，你家里有病人吧？”
- (34) a 「こんなもので稽古したの？」「だって、ここにはお師匠さんがいないんですもの。しかたがないわ。」「うちにいる {じゃないか／ダロウ}。」「中風ですわ。」(雪国)
b “就靠这些玩意儿练习？”“可不是，这儿没有师傅。没法子啊。”“家里不是有个师傅吗？”“中风啦。”(訳本)
#c “就靠这些玩意儿练习？”“可不是，这儿没有师傅。没法子啊。”“家里有个师傅吧？”“中风啦。”

これらは、聞き手も同じ認識を持っていると想定していたものが、聞き手の発話により、話し手と聞き手の間に認識のずれが生じ、それを修正しようとするものであるが、中国語の場合、今までの共通認識と違った発話によって文脈上は聞き手が認識していないことになっている場合は「吧 (ba)」を使って聞き手に依存して共通認識を図ることはできず、「不是…吗 (bushi…ma)」を使って、聞き手を誘導して共通認識を図ろうとするのに対し、日本語の場合は、こういう状況

でも、聞き手に依存して共通認識を図る「ダロウ」の使用が可能である。

4. おわりに

以上、確認要求として使われた場合の日本語の「ダロウ」と中国語の「吧 (ba)」について考察したが、両形式は聞き手が認識していることを前提に、それに依存して共通認識を図ろうとするという共通点を持っている。従って、「命題確認」の用法では推量を表す副詞との共起関係において違いが見られるものの、基本的に対応している。そして、「知識確認」用法において対応しない場合が多く見られるが、この違いは、聞き手も認識可能な状況において、話し手が聞き手も既に認識しているものとして扱うのか、それともあくまでも認識が可能なものとして扱うのかという、話し手が聞き手の認識状態をどう扱うのかという観点からある程度の説明が可能であることを示したが、ほかの視点からの考察も当然必要であり、今後の課題にしたい。

注

- 1) 中国語の「吧 (ba)」には、このほかにも命令、勧誘、依頼を表す用法もあるが、それぞれ次のように使われる。
 - (1) “老章，咱们进粮店吧！我脚冻僵了！……”“你家被窝里暖和！滚回家去吧！”（钳工）
「章さん、米屋さんにでも入ろう、足が凍ちゃってるよ……」「お前の家の布団の中のほうがもっと暖かい、とっとと帰れ！」 <命令>
 - (2) （前略）一边大声问：“谁？”门外说：“我。周敏。”门开了，牛月清笑道：“下班没回去？来得牙口怪齐的，一块吃饭吧！”（废都）
（前略）大声で「どなた？」と訊く。ドアの外で言った。「はく、周敏です。」ドアが開くと、牛月清が笑いながら言った。「お勤めの帰り？ちょうどいいところだったわ、いっしょに食べよう」 <勧誘>
 - (3) 周敏欢天喜地便要去，慧明说：“等等，我这里还另有一信函，你带给他吧。”（废都）
喜び勇んで周敏が出かけようとする、恵明が言った。「待って、もう一通、この手紙も届けてちょうだい」 <依頼>
- 2) 中国語学では、一般に真偽疑問文の一種として「吧 (ba)」疑問文と呼んでいる。推測のムードを表す疑問助詞で、文中に「大概」「也許」などの副詞があるときは「吗 (ma)」は使えず、「吧 (ba)」を使うといった説明がなされている。ここでは便宜上「確認要求」という用語を使う。
- 3) 訳本から引用の例文は（訳本）と記す。出典の記していない例文は筆者の作例又は訳文である。また、日本語例文のカタカナは筆者が加えたものである。なお、文法におかしいものは「*」、やや不自然なものは「?」、かなり不自然なものは「??」、文脈に合わないものは「#」で表す。
- 4) 「命題確認」、「知識確認」は三宅（1996）の用語である。三宅（1996）は「知識確認」をさらに「潜在

的共有知識の活性化」と「認識の同一化要求」に分けている。このほかに、田野村 (1990) の「推量確認要求」と「事実確認要求」、森山 (1992) の「伺い型の確認」と「押し付け型の確認」などの分け方がある。

- 5) 本稿でいう「デハナイカ」は、田野村 (1988) の分類の第1類のものを指す。
- 6) ここで言う「不是…吗」はく提醒 (気付かせたり、思い起こさせたりする意) >用法を指す。詳しくは王 (1992)、史 (1997) を参照。(13′) “我这画画得不是很好吗” は自分の絵を相手に自慢する文脈では使えないが、相手から下手だといわれてそれに反論するような文脈なら使える。また、例文 (14′) b “你这画画得不是很好吗?” は“我这画画得不好”のような聞き手の先行発話あるいは文脈が裏にあるというニュアンスが感じられるが、日本語の例文 (14) の場合は、そういった先行発話、文脈がなくても使えるという違いはある。しかし、話し手の認識を基準に聞き手を誘導するという点では共通している。
- 7) 「中日対訳コーパス」で対応済みの中日両国の文学作品22篇から抽出した用例について、その対訳状況と用法分布を調べたものである。日本語原文「ダロウ」に対する「吧 (ba)」の対訳率に比べ、中国語原文「吧 (ba)」に対する「ダロウ」の対訳率はわりと低くなっているが、その原因として「ダロウ」のほかに「ダロウネ」「ダロウナ」「ネ」などに対訳が分散されていることが考えられるが、詳しく検討する必要がある。

用例出典

(雪国) 川端康成『雪国』、(孤高) 新田次郎『孤高の人』(以上、CD-ROM 版新潮文庫100冊より) / (寿司) 伴一彦『寿司、食いねえ!』、(WI) 伴一彦『WITH LOVE』、(砂の) 『砂の上の恋人たち』、(以上、<http://www.plala.or.jp/ban/script.html> より) / (学び) 『これからどうなる21』『学びの共同体としての学校』2000年01月20日 岩波書店 / (ノル) 村上春樹『ノルウェーの森』講談社 / (阿川) 阿川佐和子『阿川佐和子のアハハのハ』文芸春秋 / (画祠) 李本深『画祠』 / (一半) 王朔『一半是火焰一半是海水』、(无人) 王朔『无人喝采』 / (废都) 贾平凹『废都』 / (蝴蝶) 王蒙『蝴蝶』 / (钳工) 梁晓声『钳工王』 / (欲望) 格非『欲望的旗帜』 / (訳本) 叶渭渠 译『雪国』漓江出版社、林少华 译『挪威的森林』上海译文出版社

参考文献

安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

王 志 (1992) 「交谈中的提醒句」『语言研究』第2期

王 志英 (1999) 「中国語の語気助詞“吧”の伝達機能」『中国語研究』41

木村英樹・森山卓郎 (1991) 「聞き手情報配慮と文末形式 — 日中両語を対照して —」『日本語と中国語の対照研究 (下)』くろしお出版

- 史 金生 (1997) 「表反問的“不是”」中国語文 1
- 邵 敬敏 (1996) 『現代漢語疑問句研究』華東師範大學出版社
- 曹 大峰 (2000) 「認識モダリティの日中対照例——「だろう」と「吧 (ba)」」『第7回国立国語研究所シンポジウム発表要旨』
- 田窪行則 (1990) 「対話における知識管理について——対話モデルから見た日本語の特性——」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152
- (1990) 『現代日本語の文法 I ——「のだ」の意味と用法——』和泉書院
- 鄭 相哲 (1995) 「ネとダロウとジャナイカ——確認要求形式——」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄篇『複文の研究 (下)』くろしお出版
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89号
- 宮崎和人 (1993) 「「～ダロウ」の談話機能について」『国語学』175
- (1996) 「確認要求表現と談話構造——「～ダロウ」と「～ジャナイカ」の比較——」『岡山大学文学部紀要』25
- (2000) 「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106号
- 森山卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101
- 陸 俭明 (1984) 「关于现代汉语里的疑问语气词」中国語文 5